Examine a Practice of “Childcare Cafe” through Collaboration between an University and a Local Government : Aiming at Childcare Support Rooted in a Local Community

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: YAMAMOTO, Issei, NAKAYAMA, Misa, MURAI, Naoko メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4042

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大学と自治体のコラボレーションによる「子育てカフェ」の実施と検証
―地域に根差した子育て支援を目指して―

児童学部　児童学科　山本　一成
児童学部　児童学科　中山　美佐
児童学部　児童学科　村井　尚子

要旨：本研究は、大学と自治体が連携して地域の子育て支援事業を行うことを目指して開催された「子育てカフェ」について、報告と検証を行おうとするものである。「子育てカフェ」は、大阪樟蔭女子大学が平成 20 年より毎年開催している「SHOIN 子育てカレッジ」のイベント内にて設置され、「地域の親子が気軽に来場し、子どもが遊びを楽しむ傍らで、親がほっと一息つきながら子育てについての話ができる場所」を目指して取り組まれた。アンケートの結果、81%の参加者が上記のコンセプトが実現できていたと回答し、当初のねらいがある程度達成されていたことがみとめられた。親子が心地よい距離感で過ごす空間づくりに成功した一方で、子どもから離れた親の時間を、子育ての専門家との交流や、他の親との交流につなげるという点では課題も残された。今後は、より地域に根差した取り組みとしていくために、継続的な開催や授業と連動した展開について模索する必要があると考えられた。

キーワード：子育てカフェ、子育て支援、地域連携、コーディネーション

1. 大学による子育て支援としての「子育てカレッジの取り組み」

(1) 大学における子育て支援

平成 24 年に成立した「子ども・子育て支援法」では、子ども・子育て支援は「全ての子どもの健やかな成長のために適切な環境が等しく確保されるよう、国若しくは地方公共団体又は地域における子育ての支援を行う者が実施する子ども及び子どもの保護者に対する支援」（第 7 条）であると規定されている。

これに対し、大豆生田はこれまでの様々な子育て支援の定義を検討した上で、「子育てという営みあるいは養育機能に対して、私的・社会的・公的機能が支援的にかかわることにより、安心して子どもを産み育てる環境をつくるとともに、子どもの健やかな育ちを促すことを目的とする営み」と定義する。これはすなわち、「親育ち支援」であり、「子育ち支援」であり、「まち育て支援」である[1]と大豆生田は述べている。

地方創生事業の必要性が政府によっても謳われているが、未来を担う子どもを中心として地域の住民が集い、「まち」を創っていく動きは、衰退したと言われている「地域の教育力」を活性化させる意味でも重要であるが、「まち創り」という視点で見ればもう少し大きな枠組みでその意義を捉えることも可能であろう。

こういった社会的要請の中で、大学における子育て支援の必要性と意義もまた着目されるべき課題である。

神戸親和女子大学では、2008 年から子育て支援センター『すくすく』を設置し、定期的、あるいは随時のプログラムの開催や絵本の貸し出し、子育て相談などを行っている[2]。また、武庫川女子大学でも「子育てひろば」を開設し、講習会、情報提供、子育て家庭の交流、子育て相談などのひろば事業を行っている[3]。これらの事業は、地域の子育て家庭に対する支援を行いながら、学生が子どもとその家族に接することで、子育て支援の実践や子どもの発達、親への支援の実際について学ぶ教育の機会となっていると考えられる。

大学院ベースで子育て支援を行っているのが兵庫教育大学就学前教育カリキュラム研究開発室である。同開発室では、「子育て支援ルーム GENKi」を開設し、地域の子育て支援事業を行うことを通して、就学前教育専門職（仮称）養成の教育課程の開発・幼保一体型施設子育て支援モデルの構築・就学前教育専門職（仮称）地域研修モデルの開発を担っている[4]。

(2) SHOIN 子育てカレッジの歴史

これらの拠点型事業に対し、大阪樟蔭女子大学では、学生が主体となってイベント形式での子育て支援事業を企画運営するかたちを続けてきた。平成 19 年度から 21 年度にかけて大学教育改革支援プログラム現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）「学生による地域協創型子育てモデルの開発－女子大学が行う男女共同参画社会における子育て支援モデルの提言とその社会的実践に向けて」の枠組みにおいて、主に奈良県香芝市と大阪府東大阪市という都市近郊型地域と連携して、子育て支援プロジェクトを学生が企画・実践してきた[5]。この一環として始まった「SHOIN 子育てカレッジ～絵本で広がる子育ての輪～」は、平成 20 年から毎年開催されてきている（表 1 参照)。

表 1　SHOIN 子育てカレッジの概要

日時	開催場所	受講者数
平成 20 年 7 月 19 日（土）ー21 日（月）	大阪樟蔭女子大学関屋キャンパス（香芝市）	1285 名
平成 21 年 7 月 19 日（土）ー20 日（日）	同上	1172 名
平成 22 年 7 月 24 日（土）ー25 日（日）	同上	720 名
平成 23 年 7 月 23 日（土）ー24 日（日） 8 月 21 日（日）	同上 同上	826 名 338 名
平成 24 年 7 月 28 日（土）ー29 日（日）	同上	1294 名
平成 25 年 7 月 13 日（土）ー14 日（日）	同上	1650 名
平成 26 年 7 月 19 日（土）ー20 日（日）	同上	1049 名
平成 27 年 7 月 12 日（日）	大阪樟蔭女子大学小阪キャンパス（東大阪市）	812 名

平成 20 年度及び 21 年度は現代 GP の一環として実施されたが、平成 22 年度からは学生と職員、児童学部教員が共に参画する SHOIN 子育てカレッジ実行委員会（以下カレッジ実行委員会と呼ぶ）によって企画運営が担われている。平成 24 年度から 26 年度は独立行政法人国立青少年教育振興機構の子どもゆめ基金から助成を得て、絵本を核としたプログラムを実施した。例えば平成 26 年度は①絵本ワールド（本学で所有する絵本から学生実行委員が選定したものを展示した絵本コーナーで、学生が読み聞かせを行う）②『絵本の世界で遊ぶ』～絵本をテーマとしたワークショップ～(3 年次のゼミ単位、2 年次のコース単位で学生達がワークショップを企画運営するほか、部活動や有志での参加もある）③『絵本って楽しい！』～絵本の魅力を再発見～（絵本作家の講演会や人形劇団による公演、読書講座や紙芝居など）の 3 つの枠組みで行い、多くの地域の親子連れに参加していただいた。

平成 26 年度には「くすのき地域協創センター」が設置され、地域との連携を学生の学びに有機的に結びつける取組の実施主体として機能することとなり、カレッジ実行委員会もセンターと児童学部学生、教職員との共同で開催されることになった。

児童学部の所在地が香芝市から東大阪市に移転した平成 27 年度には、趣向を新たに児童学部・小阪キャンパス移転記念・子育てカレッジ「SHOIN 子育てカレッジ 2015」と銘打ち、東大阪市子育て支援課との協働の取組を一つの柱として打ち出した。

(3) SHOIN 子育てカレッジにおける学生の学び

上述の通り、SHOIN 子育てカレッジ（以下子育てカレッジと呼ぶ）は地域の子育て支援を目的とすると同時に学生の学びをその中心に据えているのが特徴である。1 年次の学生は授業の一環として子育てカレッジに見学参加し、上級生がワークショップを主体的に運営する姿をロールモデルとする。2 年次の学生は子ども芸術表現コース、臨床保育・福祉コース、子ども心理教育コースの 3 つのコースに分かれ、ミュージカルや劇を演じたり、絵本の読み聞かせや積み木ワークショップなどに携わったりする。3 年次の学生が文字通り子育てカレッジの主役であり、それぞれの所属するゼミにおいて 4 月当初からワークショップのテーマ設定、準備、買い出し、製作などに追われる。ワークショップの企画運営に関してゼミ教員は基本的には口出しせず、学生達に委ねているため、10 名から 20 名ほどのゼミ構成員が時には協力し、時には悩み、葛藤を重ねながらワークショップ当日まで準備を重ねていく。

自分達が苦労して創り上げたワークショップに多くの来場者が来られ、子ども達が喜ぶ姿を目にし、保護者に感謝していただくことで、学生達は実習とはまた別様の経験を経て一回りもふた回りも成長すると言える。

ところで、日常的に子育て支援活動に携わる拠点型の事業と比べると、子育てカレッジはイベント型であ

り、一種の祭りとも言える。

ドイツの教育学者F・ボルノウは、祭りの教育学的意義について7つの点を挙げている。このうち、とりわけ、祭りの意味は、日常生活とは別個に催される行事を最後までやりとおして、じゅうぶん深くそれを経験すること自体の中にあること、祭りは自発的な参加を必要とすること、祭りの気分の中で、ひとは他のいかなる方法によっても獲得することのできない共同感、その瞬間をこえて後までも持続する共同感を経験すること、教師もまた、祭りを実際に内面的にも子どもたちと共に体験し、ともに祝うことが肝要である[6]ことという点において子育てカレッジのもつ教育学的意義を重ね合わせることが可能である。

このような教育的意義をもつゆえに、子育てカレッジは本学児童学部の学生にとってはなくてはならない最大の行事であり、児童学部の学びは子育てカレッジに集約している部分があると言っても過言ではないかもしれない。その上で、祝祭であるがゆえの課題についても認識しておく必要があるだろう。すなわち、年に1回（年度によっては2回実施したこともあったが、夏季期間は2、3年次の保育実習と重なるために開催が難しく、昨今は1回の開催が定着している）のイベントである限り、地域の親子との継続的な関係性が作りづらい点が挙げられる。これに対して、子育てカレッジに地域の親子と自治体とをつなぐことで、この課題に別の形でアプローチしようという試みが平成27年度に新たに取り入れられた「子育てカフェ」である。

以下に、子育てカフェの概要を示し、参加者のアンケートによる検証を行うことで、大学による地域に根付いた子育て支援の取り組みの可能性を検討していく。

2.「子育てカフェ」の企画立案

(1) 地域の親子にとっての場

大学が地域と連携し子育て支援を行うことは、地域の中で暮らす子どもたちとともに、その保護者や関係する人々、学生や教員がともに育っていくことにつながる。

子育てカフェは地域で暮らす子育て中の親子が、ゆったりとした空間でお茶を飲みながらホッとする場であってほしいとの思いから企画された。特に未就園児の子育て中は、ホッと一息つきたくてもなかなかその時間が持てなかったり、時間があってもどこかで気持ちの余裕が持てなったりすることがある。また、子どもの育ちに不安を感じ、子育てに疑問を感じることもあるかもしれない。「子育てに関する色々な話を誰かに聞いてほしい」、「わざわざどこかに出向いて相談するほどでもないけれど、機会があれば相談してみたい」、あるいは「同じ年頃の子ども達ともっと触れ合いたい、遊ぶ場がほしい」といったニーズがあることが予想された。

東大阪市では市の子育て支援課が親子の育ちを支援する場所の提供や、保育士、子育てサポーター、心理士などの専門の知識を持たれた方々による支援も行っている。子育てカフェはそのような行政の専門職と連携し、親子への支援を広げる場でありたいという願いがあった。来場する親子には、地元の児童館や子育て支援センター、心理士の在籍する場所といった、自分の住んでいる地域の中の相談場所や、安心して子どもを遊ばせることができる場所がたくさんあることを知らせる架け橋になることを意図して、「子育てカフェ」を企画した。

(2) 学生の関わる場

一方、このような親子の場をつくることは学生にとっても実践的な学びにつながっていくと予想される。学生が多くの子育て中の親子と触れ合うことによって、子育ての面白さや楽しさ、大変さを感じ取ることができる。また、子どもの年齢による育ちの違いや、同じ年齢であっても個々の子どもによって育ちが違うこと、兄弟のいる子どもと一人っ子の違いや、それによる子どもへのかかわり方の違いなどを学ぶこともできると考えられる。多くの学生は保育所実習などで子どもへの学びを深めることはあるが、親子のかかわりを学ぶ機会は多くはないと思われる。また市の多くの専門職の方々の支援の仕方を具体的に見聞きし、子育て支援の在り方を学ぶ機会な学びになるといえるだろう。

教員もまた地域の親子や、行政専門職の方と関わる機会をもつことで、学生たちがより良い学びを得るためにはどのような指導が必要なのかについて、より実践的に考える機会となる。

次の世代を担っていく子どもたちは私たちの宝物である。一人ひとりの子どもの育ちを社会全体で支援していこうとする今、大学の子育て支援の役割も地域の中でなくてはならない存在になっていく必要がある。今回の子育てカフェは、その足がかりの一つとなることができればとの思いから開催することとなった。

(3) 東大阪市との連携

「子育てカフェ」の実施にあたり、担当者が東大阪市を訪問し、企画の相談を行った。大学自体は現在の

東大阪市に設立されてから97年の歴史があり、これまでも多くの連携を行ってきた実績がある。しかし、現在の児童学部は2015年に東大阪市のキャンパスに移転したこともあり、「子育てカフェ」の企画内容については一からの話し合いを行った。

東大阪市では、子育て支援センターやつどいの広場を中心に、地域の親子が気軽に立ち寄ることのできる子育て支援を展開している。また、福祉事務所に子育てサポーターを配置する制度を立ち上げ、保護者の子育てについての相談から、それぞれのニーズに合った支援サービスの情報提供を行う取り組みも行っている。

「子育てカフェ」の企画について話し合うなかで、保育士や子育てサポーターが日常的に行っているこれらの支援を、大学の非日常的なイベントのなかで行うことによって、これまでそのようなサービスとの接点がなかった家庭に対しても情報提供を行うことができるのではないかという利点が浮かび上がってきた。また、「子育てカフェ」を居心地の良い場にしていくために、そのような専門性をもつ支援スタッフが常駐することで、来場者が安心して相談できる体制を整えることができるのではないかと考えた。

結果として、今回の子育てカフェには、東大阪市より保育士、子育てサポーター、心理士が参加し、来場者への支援を行う体制が得られることとなった。

また、東大阪市が提供する「子育てハッピーメール」等のツールを用いて広報することによって、普段なじみのうすい大学内での子育て支援イベントという情報を周知することを図った。

(4) 児童学会・付属幼稚園との連携

大阪樟蔭女子大学の児童学科は、1949年に設立され、およそ5000名の卒業生を送り出している。保育者や教員として働いている卒業生も多く、大学で行う子育てに関わるイベントについては、情報提供の窓口となることができる。卒業生が加入する組織である児童学会と連携して広報を行うことで、子育て支援を必要とする世代への情報提供を行った。同様に、付属幼稚園とも連携して広報活動を行い、地域の多くの親子に参加してもらうことのできるイベントを目指した。

3. 当日の様子の概要

子育てカフェ当日は子ども達やその親子を迎え入れる準備を学生たち、市の方々、教員のそれぞれが期待をもって行っていた。それぞれのコーナーには木のおもちゃ（おままごとセット、積木など）コーナー、絵本コーナー、カフェコーナー、企画ステージを設定した。子育てカフェでは保護者の方々が子どもから少し離れた場所でお茶を飲み、ゆったりくつろいで頂こうという内容であったため、保護者から離れても遊べる子ども達は学生と一緒に遊べるように企画されていた。

写真1　当日の会場の様子（左手前が絵本コーナー、左手奥がカフェコーナー、右手が木のおもちゃコーナー）

イベント当日は多くの来場者でにぎわった。木のおもちゃコーナーは、カフェ近くにあったため保護者も子ども達も安心だったことと、木のおもちゃに人気が集まったことから、来場者が多く感じられた。絵本コーナーでは、学生たちが積極的に子ども達が興味を持った絵本の読み聞かせをしていた。コーナーごとの遊び場所では、はじめ保護者から離れられなかった子ども達が自然に学生のところに行き、学生が子ども達をうまく遊びの中に誘って遊ぶ姿も見られた。ステージでの出し物では児童学科芸術表現コースの学生による手遊びや劇、音楽演奏などが行われ多くの親子が参加し楽しんでいた。出し物もいろいろな種類があったため、子ども達も興味を持って一緒に歌ったり劇に見入ったりしていた。

写真2　木のおもちゃコーナーの様子

子どもが保護者から離れて学生たちと遊ぶ姿もあったが、中には子どもが保護者から離れられず保護者と一緒にお茶を飲んだり遊んだりする場面も多く見られた。子どもの年齢から考えると自然なことでもあるが、お茶を飲むところで子どもとともに座り「おいしいね。」と笑顔で飲み物を飲む姿にはホッとさせらるものがあった。保護者が子どもに「いろんなおもちゃがあるね、どれで遊ぼうか。どれで遊びたい？」「積木で遊ぶ。」などと話し合っていた。

保護者がくつろいでいるところに市の専門家の方々が笑顔でさりげなく声をかける姿が見られ、保護者の方々のお話に耳を傾けていた。「お元気なお子さんですね。何か月ですか？」「暑い日が多いですが体調はいかがですか？」「元気に泣いていますね。おなかがすいたかな？眠いのかな？」というように、親子の様子を見ながら声のかけ方を工夫して接していた。保護者の方々からは多様な内容の話が聞かれた。カフェでの雑談のなかで「子どもの食欲はあるけど私のほうがばててしまって。」「今日は大学に遊びに来たけど普段はあまり子どもを遊ばせるところがなくて、もっと遊び場所を知りたい。」「3 人目の子どもなので子育てを楽しんでいる。」「最近、保育所に子どもを入れたけど子どもとの時間をどうとっていいかわからない。離れている間は寂しい。」「他の子どもとの育ちの違いが目について心配。」「同じくらいの子どもと遊ばせたいけどどこで遊べばいいか。」「今日は日曜日で父親も参加できてよかった。」「大学に遊びに来るのは初めてだけど若いお姉さんの学生がたくさんいて元気に子ども達と遊んでもらえてよかった。」などの声が聞かれた。市の専門家の方は保護者からの話を聞いて、それぞれの内容に合った担当の方や親子の地元の関係施設を紹介するなど、今後の子育てに役立つ情報を伝えていた。

受付の学生は飲み物とアンケートを配りながら、親子の様子を見たり、市の専門家の方々の話を聞くなどをして、子育て支援の様子を目の当たりにしていた。話を聞き取る時の声掛けやしぐさなども学べていた様子である。飲み物を子ども達に渡す時も子どもの目線に立ちゆっくりと話を聞けていた。

写真 3　カフェでの会話の様子

市の職員の方々からは「多くの子育て支援の場がたくさんある中でこんなに多くの方が集まられたことに驚きました。」とお話を頂いた。筆者自身、多くの方々にお越しいただけたことに大きな喜びを感じ、それを支えて下さったたくさんの関係者の方々に感謝の気持ちでいっぱいになった。お越しいただいた多くの親子の方々、学生たち、市の専門家の方々、教員にとって多くの気付きや喜びなどにつながる 1 日であったと感じている。

4. アンケート結果の分析

以下では、子育てカフェで実施したアンケートの結果について分析する。アンケートは、「参加者用」「学生スタッフ用」「東大阪市職員用」の 3 種類を用意した。参加者用アンケートは、子育てカフェに来場した保護者に趣旨を説明して配布し、その場で記入後、回収した。学生スタッフ用、東大阪市職員用については、子育てカフェ当日の勤務終了後、回答を依頼しその場で回収した。アンケート項目の詳細を表 2 に示す。

アンケートの有効回答数は、参加者用が 143、学生スタッフ用が 14、東大阪市職員用が 11 であった。

(1) 参加者の概要

参加者の概要を以下に示す。参加者の年齢、性別、職業について、表 3 に示した。子育て世代の女性の参加が多かったことが伺え、男性の参加は 13%にとどまっている。

(2)「ほっと一息つける場所」としての子育てカフェへの評価

次に、「ほっと一息つきながら子育てについての話ができる場所」という子育てカフェのねらいが実現できていたかどうかについて検証していく。「1 ほっと一息つける場所の必要性」および、「1 のコンセプトが実現できていたか」というアンケート項目については、参加者用、学生スタッフ用、東大阪市職員用のすべてに記載し、回答を得た。

「1 ほっと一息つける場所の必要性」については、参加者用では、「絶対に必要」が 73%、「やや必要」が 24%となり、97%の参加者がそのような場を必要

表２　アンケートの項目

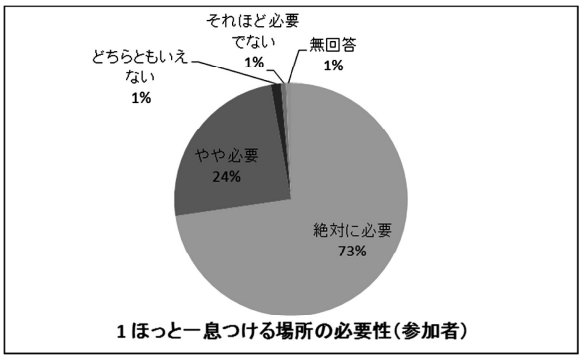
［参加者用］
質問１　地域のなかに、「子育て中の親が気軽に来場し、ほっと一息つきながら子育てについての話ができる場所」はどの程度必要だと思いますか？
質問２　今回の「子育てカフェ」で、上記のコンセプトは実現できていたと思いますか？また、そのように回答した理由についてお聞かせください。
質問３　大学が主催する「子育てカフェ」にどのようなものを望みますか？あてはまるものに○をつけてください（複数回答可）
質問４　今後「子育てカフェ」が開かれることがあれば、もう一度参加してみたいと思いますか？
質問５　大学が主催する「子育てカフェ」を利用するとすれば、どのような時間帯が参加しやすいですか？（複数回答可）
質問６　その他、「子育てカフェ」についての感想やお気づきの点等があればご自由にお書きください
［学生用］
質問１　地域のなかに、「子育て中の親が気軽に来場し、ほっと一息つきながら子育てについての話ができる場所」は、どの程度必要だと思いますか？
質問２　今回の「子育てカフェ」で、上記のコンセプトは実現できていたと思いますか？また、そのように回答した理由についてお聞かせください。
質問３　今回の「子育てカフェ」で子どもや保護者の方と関わるなかで、学んだことや印象に残ったことについて記入してください。
質問４　大学が地域の方にむけて「子育てカフェ」を実施するとすれば、どのような場所になれば良いと思いますか？具体的なアイディアや、コンセプトについて自由にお書きください。
［東大阪市職員用］
質問１　地域のなかに、「子育て中の親が気軽に来場し、ほっと一息つきながら子育てについての話ができる場所」はどの程度必要だと思いますか？
質問２　今回の「子育てカフェ」で、上記のコンセプトは実現できていたと思いますか？
質問３　「子育てカフェ」が以上のコンセプトを実現できたと考える理由についてお書きください
質問４　「子育てカフェ」が以上のコンセプトを実現できなかった理由、および、どうすれば実現できるようになるかについてお書きください
質問５　「子育てカフェ」は、「子育てについて支援を必要とする家庭と行政サービスとを接続するきっかけとなる」というコンセプトをねらっています。そのような場所は、どの程度必要だと思いますか？
質問６今回の「子育てカフェ」で、質問５に記したコンセプトは実現できていたと思いますか？
質問７　「子育てカフェ」が上記のコンセプトを実現できたと考える理由についてお書きください。また、今回のカフェのなかで、それに該当する事例がありましたら可能な範囲でお書きください。
質問８　「子育てカフェ」が上記のコンセプトを実現できなかった理由と、どうすれば実現できるようになるかについてお書きください。
質問９　大学が主催する「子育てカフェ」にどのようなことを望みますか？あてはまるものに○をつけてください（複数回答可）
質問１０　大学と行政が連携して子育て支援を行っていくことにはどのようなメリットがありますか？それぞれのお立場からのご意見をお聞かせください。

表３　参加者の概要

年齢		性別		職業	
20代	10	女	109	主婦	55
30代	70	男	19	会社員	29
40代	37	無記入	15	保育士	8
50代	2			公務員	7
60代	2			パート	4
無記入	22			無職	3
				無記入	32
				その他	5

(人)

としていたことが明らかになった。学生スタッフの回答では、「絶対に必要」が 79%、「やや必要」が 21%となり、100%の学生が必要と考えていた。東大阪市職員への質問では「絶対に必要」が 91%、「やや必要」が 9 %となり、100%の割合で必要だと考えていた。子育て中の親が一息つける場所は、かなりの親がそれを必要としている状況にあり、支援する側もその非常に高い重要性を認識していることが伺える。



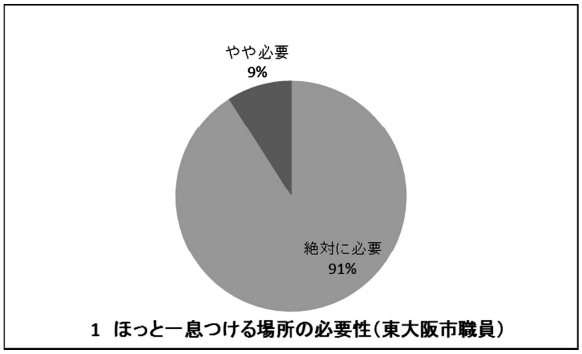


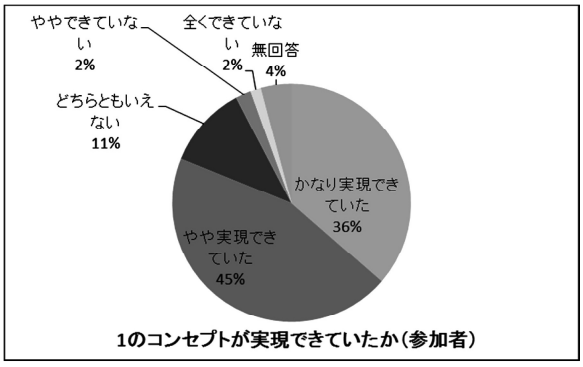
図１「ほっと一息つける場所の必要性」への回答

次に、「1 のコンセプトが実現できていたか」という質問への回答、およびその回答の理由についての結果を見ていく。参加者の回答では、「かなり実現できていた」が 36%、「やや実現できていた」が 45%となり、81%の参加者が実際にほっと一息つける場所として、「子育てカフェ」を体験していたことが伺える。実現していた理由についての記述を見ると、「親の目が届く範囲で子どもが遊べて、親と少し離れるちょうどいい感じ。」という意見や、「学生さんたちが子どもと遊んでくれるので、親はある程度はなれて観察することができる。囲まれている場なので迷子にならない。」といった意見が聞かれた。このような声から、保育について学ぶ学生が子どもに関わることへの安心感や、子どもに目を離さずにいながら手元からは離れる距離感など、当初の空間づくりのねらいがある程度は成功していたと評価することができる。また、「スタッフが積極的に話しかけてきてくれた。」「スタッフ（支援

センターの方）が声をかけてくださり、少し話ができたから。」という意見が聞かれ、子育ての専門家に声をかけてもらえる場であったことも、「ほっと一息つける」要因として働いていることが伺えた。一方、「友人と一緒だといいですが、単独だと話をするのは難しいのでは？」という意見も聞かれ、カフェでの交流をつくりだすことの難しさも課題として残された。

学生スタッフの回答では、「かなり実現できていた」が14%、「やや実現できていた」が72%となり、86%の学生がほっとできる場所をつくることに対して、なんらかの手応えを感じていたようであった。「今後に向けてのアイディア」として、「子どもたちが安全に遊べて、親は他の親と悩みを相談しあったりできる場所」「落ち着いてゆったりできるような場所。もう少し席を増やした方がよいと思う。」という回答が見られたように、学生自身も子育てカフェのコンセプトを理解し、よりそれを実現するためにはどうすればいいかを考えていたことがうかがえた。

一方、東大阪市職員の回答では、「かなり実現できていた」が18%、「やや実現できていた」が46%と、コンセプトの実現を評価したのは64%にとどまった。東大阪市職員の回答の理由を見ると、「保護者の方々がゆったりと過ごされている姿をたくさん見ることができました。お子さんもゆったりされていてよかったです。」という意見がある一方で、「『ホッと一息』の場の提供にはなったと思いますが、保育士、心理士、子育てサポーターなどの専門スタッフが参加しているのに（中略）各々が自主的に入り込んでいくという形になったため、入っていくタイミングも難しく、せっかくのスタッフが活用しきれなかったように思います。」といった意見も聞かれた。カフェで一息つく時間のなかで親同士や子育ての専門家との交流が生まれることが重要であることを踏まえれば、スタッフの専門性を生かしてより交流を促進できる仕組みをつくることに課題が残されたと言えるだろう。



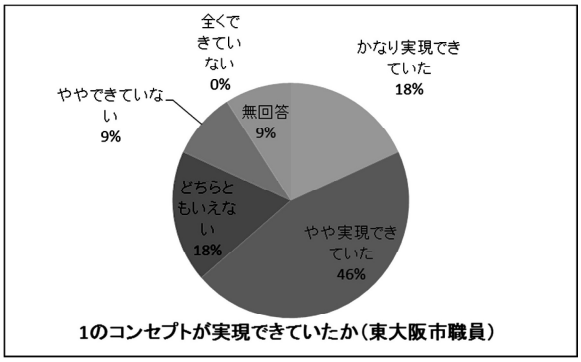


図2 「1のコンセプトが実現できていたか」への回答

次に、「もう一度参加したいと思うか」という質問に対する参加者の回答の結果を示す。参加者の67%が「ぜひ参加したい」、28%が「参加を検討したい」と回答しており、95%が今後の参加に対して前向きな印象を抱いていることが明らかになった。「ほっと一息つける場所」が高い割合で必要とされていることと合わせて考えれば、親子がともに過ごすことのできる居場所へのニーズは非常に高く、そのようなニーズを満たす場所として「子育てカフェ」が機能していたことを示す結果となったのではないか。

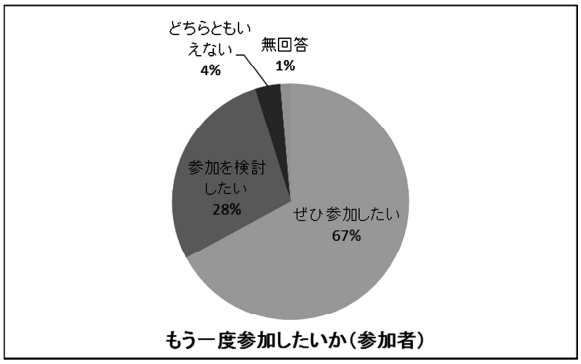


図3 「もう一度参加したいか」への回答

以上の結果を踏まえると、今回の子育てカフェは、子どもたちが学生と遊びを楽しむ、その傍らで親がくつろぐというねらいについて、ある程度達成できたと評価できる。このような場に対して高いニーズがあったことも踏まえ、今後の発展的な展開を模索していく必要があるだろう。一方、親子が心地よい距離感で過ごす空間づくりには成功したが、子どもから離れた親の時間を、子育ての専門家との交流や、他の親との交流につなげるという点では課題も残された。今回は東大阪市の専門スタッフの積極的な対応がカフェでのコミュニケーションを生成させることとなったが、今後は対話しやすい空間の構成や、テーマトークなどの仕掛けを取り入れることによって、参加者同士、あるい

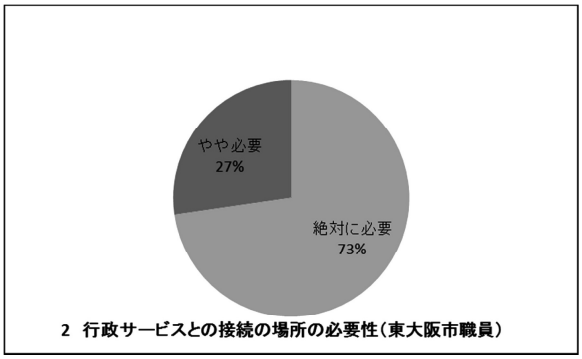
はスタッフとの交流をしやすくする改善を行うことが必要であろう。

(3)「行政サービスとの接続の場所」としての子育てカフェへの評価

次に、「子育てについて支援を必要とする家庭と行政サービスとを接続するきっかけとなる」場所としての子育てカフェについて検証していく。参加者へのアンケートが過重になることを避けるため、「2 行政サービスとの接続の場所の必要性」および「2 のコンセプトが実現できていたか」という項目については、東大阪市職員へのアンケートのみに設定した。

「2 行政サービスとの接続の場所の必要性」への回答では、「絶対に必要」が 73%、「やや必要」が 27%という結果が得られた。自由記述による回答でも、「市の施策として子育て支援をやっている行政と子育て支援、育児について研究している大学が連携することで、よりよい（深い）内容を追求できますし、それぞれの立場でのつながりをより有効に広げることができる。」という回答や、「行政が行っているいろいろなサービスを大学によって知らせていただけたら、サービスを知らなかった方も利用できるのではないかと思います。」という回答が得られ、大学が行政の子育て支援サービスと地域の子育て家庭の接続の場となることには大きなニーズがあると考えられた。

一方、「2 のコンセプトが実現できていたか」という項目に対しては、「かなり実現できた」という回答は 0 %であり、「やや実現できた」が 73%、「どちらともいえない」が 18%、「ややできていない」が 9 %という結果であった。自由記述では、「行政サービスについて知らない方に対して行政が行う子育て支援の情報を伝えることができた」という回答がある一方で、「カフェを訪れる人たちが必ずしも支援を必要とする家庭ばかりではなく、むしろ『ホッと一息しにきただけ』という人の方が多いと思うので、このカフェに来たことをきっかけに子育てについての話題にしていく何らかの工夫がいるように思います。」という回答もみられた。たまたま子どもを連れて遊びにきた親がこれまで知らなかった行政のサービスを知るという面ではある程度の効果があったと思われるが、それがサービスの利用や、支援を必要とする家庭へのコーディネートにつながるかという面では課題が残されているといえる。2 のコンセプトをより効果的に実現していくためには、来場者と行政の専門家がより会話をしやすくする工夫や、子育て支援の場として子育てカフェの広報を行っていくことなど、さらなる改善が必要であるように思われた。



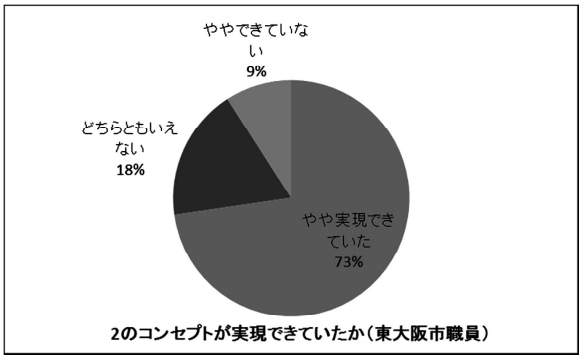


図 4 「行政サービスとの接続の場所の必要性」と「それが実現できていたか」についての回答

(4) 子育てカフェに望むもの

最後に「大学が主催する子育てカフェにどのようなものを望みますか？」という質問への回答を検討することで、今後の子育てカフェのあり方を探っていきたい。

参加者の回答で多かったものは、「子ども連れで入れる」(33%)、「学生と交流できる」(15%)、「悩みが相談できる」(12%)、「フードやドリンクが充実している」(12%) であった。東大阪市職員の回答と比較してみると、「子ども連れで入れる」(35%)、「悩みが相談できる(22%)と上位は同様であるが、「学生との交流」や「フードやドリンクの充実」を求める声は参加者の方が多かった。

これまで述べてきたアンケート結果も踏まえて考察すれば、子育てカフェは、子ども連れで来られるということを前提としつつも、専門家に悩みを相談したい親、お茶や食事をとりながらほっと一息つきたい親、子どもと学生の交流をめあてとする親など、多様なニーズに対応することが求められる場であるといえるだろう。ほっと一息つきたい親と本格的な支援を必要とする親という異なるニーズをもつ対象者を想定して企画を行う難しさはあるが、どのような目的であれ気軽に

来ることができるという前提を保ち、来場後にそれぞれのニーズに合った過ごし方ができる工夫をすることによって、包括的な子育て支援の場として機能していくことが望ましいといえるのではないだろうか。

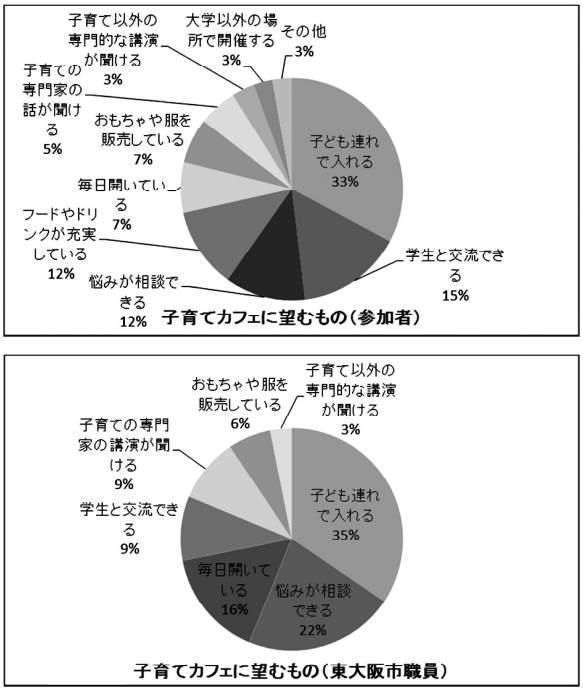


図5 「子育てカフェに望むもの」についての参加者と東大阪市職員の回答の比較

5. 子育てカフェの成果と今後の課題

ここまで見てきたように、今回の子育てカフェでは「地域の親子が気軽に来場し、子どもが遊びを楽しむ傍らで、親がほっと一息つきながら子育てについての話ができる場所」というコンセプトについてはある程度実現することができたと評価することができる。学生が子どもたちとの関わりを通して実践的に学びつつ、保護者にとっても子育てが豊かになるような場を作っていくことで、大学ならではの子育て支援を行うことができると考えられる。

一方で、カフェの場でのコミュニケーションをいかにして専門家との交流や、保護者同士の交流につなげていくかという問題については、今後の課題として取り組んでいく必要がある。会場の空間構成やプログラムの工夫を行うことによって、より交流が促進される場を実現していくことや、支援が必要な家庭と自治体が提供する支援サービスとを接続する工夫についても、さらなる改善が必要であろう。

「子育てカフェ」がそのような交流の機能を果たすものとなっていくためには、開催の頻度の問題についても検討せねばならない。授業との連携などを通して開催の頻度を上げる方法を検討することで、「子育てカフェ」が地域のなかに根付いた支援の場になっていくのではないか。この点については、大学全体として、カリキュラムや施設の問題を含めて可能性を検討していく必要があるだろう。

「子育てカフェ」の実践を通して、将来保育者や教師になる学生の学びと、地域での子育て支援が両立できるような方向性を模索していくことが求められる。

註

1 大豆生田啓友『支え合い、育ちあいの子育て支援－保育所・幼稚園・ひろば型支援施設における子育て支援実践論』関東学院大学出版会、2006年、43−44ページ。

2 http://www.kobe-shinwa.ac.jp/facilities/sukusuku/（平成27年9月15日）

3 http://www.mukogawa-u.ac.jp/~kosodate/（平成27年9月15日）

4 http://www.hyogo-u.ac.jp/preken/project.html（平成27年9月15日）

5 https://www.osaka-shoin.ac.jp/univ/gp/kosodate/activity/index.html（平成27年9月15日）

6 O・F・ボルノウ著、森昭・岡田渥美訳『教育を支えるもの』黎明書房、2006年、188〜195ページ。

参考文献

橋本真紀『地域を基盤とした子育て支援の専門的機能』ミネルヴァ書房、2015年。

北野幸子・立石宏昭編著『子育て支援のすすめ－施設・家庭・地域をむすぶ』ミネルヴァ書房、2006年。

原田正文『子育ての変貌と次世代育成支援』名古屋大学出版会、2006年。

付記

本稿は、第1章を村井、第2章、第3章を中山、第4章、第5章を山本が主に執筆した。

なお、本研究は、平成27年度大阪樟蔭女子大学くすのき研究助成プログラムの助成を受けている。